

希望の春か？

新学期が始まった。子供たちは皆それぞれに進級し、「先生はだれかな?」「どんな友だちと一緒にかな?」と、希望に胸はずむ新学期である。私はこの3月に小学校送り出した子どもたちも、皆、新しい学校に、制服に、こころ弾ませてるだろうか?私にはそれが気がかりだ。

すさまじい、受験勉強

気になるのは、私立中学を受験した子ども達である。私の勤める学校では、毎年、私立中学校を受験する子どもたちが多く、今年も約3分の1の子どもたちが受験した。私が驚いたのは、その数の多さにももあるが、一番驚かされたのは、受験勉強の凄まじさだった。同志会からの帰りに、駅で小学生の姿を見かけることが多かったから、受験のために9時ごろまで塾に通う子がいることは知っていたし、自分のクラスの子どもたちも例外ではないだろうと思っていた。しかしその異常さに気がついたのは、6年生の2学期を過ぎたころだった。それまで普通に学校生活を送っていた子どもの中に、時々休んだり遅れたりする子が出た。授業も集中力がなくなりボーッとしたり、几帳面にしていた宿題を忘れようになったりすることが目につき出したからだ。何か変だと思い、子どもたちに、1週間に通っている塾とその時間帯を書かせてみた。すると受験しないことは5時から7時の時間帯に塾に行っているのに対し、受験する子どもは、10時ごろまで通っている子が多かった。中にはお弁当持ちで、5時から10時という子もいたし、1番遅い2人は、なんと夜中の1時まで、塾があり、家に帰り着くのは、1時30分というありさまだった。

学校生活を見直す受験組

3学期になるとそれはさらにエスカレートし、遅刻、早退、欠席が当たり前のようになり、クラス全員の顔がそろふことはなくなってしまった。卒業に向けての学級の雰囲気づくりどころではなかった。また、集団登校の班長でありながら集まらない。放課後の委員会活動は抜けるなど、学校生活を最高学年として役割を果たせないで、学校生活を乱すになっていた。思い悩んで、他校の友達数人に聞くとを、それぞれの学校で、大なり小なりこのようなことは起きていることが分かった。

傷つく戦士たち

私のクラスを受験者男子は、全員が希望校に合格することができず、二次試験に駆け回って、3月10日ようやく全員の進学先が決まった。「3年生から遊びを我慢して勉強してきたのに」とそのショックはかなり大きかった。しかし、不合格で傷つくだけでなく、こうした子どもたちも、やはり傷ついていると私は思うのだ。

委員会活動などで、自分の役割を果たせなかったことに責任感を感じ暗くなった子。テストで良い点をとることしか頭になく、それ以外の活動や勉強に意義やおもしろさを感じられなくなっている子ども。逆に、テスト勉強など、何の役にも立たないと分かっているながら頑張るしかない子。皆それぞれ傷ついているのだ。

教師ができることは?

学校を休んでまで何をするかといえば、もちろん塾通いである。塾はそれを奨励する。

何故そこまでして受験すると言えば、間違いなく地元の荒れた中学に進学したくないからだ。親はそのため、なりふり構わず、学校を休ませることは問題だと思いつつも、塾のペースにはまってしまう。塾のやり方は非常に問題である。しかし塾のあり方を批判したり、わが子だけはどう思う親を批判することは簡単だが、それでは何の解決にも向かわない。

その根本には、学歴社会の問題があり、これをすぐになんとかすることはできない相談だ。

親がそこまでして良い学校にと思うのは、それだけよい教育に対する熱意の表れであり、その思いをなんとか「我が子だけは…」に向かわせない方法を考えることが、われわれ教師にできることではないだろうか。せめて、中学年を担任したら、折りに触れて、無理な受験勉強がどれだけ子どもの心を壊してしまうのかを知らせることが必要だ。そして、小学生の今の時期に何が大切かを話し、親にも考えてもらうことだ。

親が手をつなぎ、地域とつながり、地元の中学校を希望あるものに変えていく方法を親とともに考えてことも大切だと思う。